

平成28年7月31日(日)

老球の細道254

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

世界中で自分とは違う異質に対する排除思考による悲しい事件、悲しい言動が相次いでいる。これからもその気運は止みそうにもない。カナダの哲学者は言う。信頼と共感を寄せられる範囲が知らぬまに縮まって、人々の意識が自分の属する特定集団の利益を図るほうに向かう社会の断片化は、専制による統制より危険だと。

1・読書から

◆「山のおくをたずぬるに、なお奥へと行かんと思えば、又口へ出るものなり」〈魚住孝至著『宮本武蔵』〉

天才剣豪と言われた宮本武蔵をしても、剣の道を極めるために行きつくところは基本であった。二つの高校から基本中の基本である「ワンハンドシュート」のクリニックを依頼された。当たり前のこと、簡単なこと、基本的なことが100%できているか。

◆「死を前にして、ほとんどそれを眼中におかず、自分の志を述べつづけることによってのみ日常を送った明治の文人が、タカジのなかで人間はそうあるべきだという一個の典型になった」〈司馬遼太郎著『ひとびとの登音(上)』〉

肺結核で若くして世を去った俳人・正岡子規は病中であっても、友人たちが訪ねてくると苦しむ様子など一切見せず、俳句論、文学論を皆で語り合ったという。また、独りでいるときは庭に咲く花や食べ物などの写生にいそしんで残り少ない時間を完全燃焼させた。その気丈さこそ精神の世界に生きた人間の真骨頂なのだろう。真似できるだろうか？

◆「欲は大事ですよ。勝ちたい気持ちはもちろんあります。ただ、強く思わないほうがいい結果に結びつくことは経験則で知っている。それも、欲と言えば欲なんです」〈『週間現代』将棋家羽生善治インタビュー〉

日本人は、強い自我とか気持ちを前面に出すことが弱い。自分で欲を抑えてしまって、持ってる力を発揮できない。結局、最後は「勝ちたい」と強く思う方が勝つ。

2・新聞等のコラムから

◆「生きているということは 誰かに借りをつくること 生きていくということは その借りを返してゆくこと 誰かに借りたら誰かに返そう 」〈朝日新聞・永六輔作詞『生きているということは』〉

今まで色々な人たちに借りをつくって生きてきた。特に両親とバスケットボールにはお世話になった。今は亡き両親にはあの世で借りを返そう。バスケットボールにはこれからきちんと返していこう。

◆「繰り返すことが大切。すぐに成果を求めてはだめ」「高いハードルを用意して、それを超えさせるのも大切」「マイナスの言葉は子どもの心の働きを悪くし、本来持っているはずの能力にフタをする」〈朝日新聞・オリンピックの育ち方・水泳選手池江璃花子の母〉

人を育てる原理原則は皆同じ。ミニバスの子どものたちの指導をしていて学ばせてもらっている。その学んだことを今度はわが孫たちに応用しオリンピックに！なんちゃって！

3・クリニックレジメから

◆「笑顔は最高の身だしなみである」〈『ユーモア話材集』〉